

毛 丹青 (まお たんせい)



職位

客員教授

所属学科・グループ

中国学科

専門分野

中国語、中国文学、日本文化論

講義科目

「中国語講読」

経歴

- 1985年 北京大学 東方言語学部 卒業
- 1987年 三重大学留学
- 1989年 白光水産に就職
- 1993年 神栄株式会社に転職
- 1998年 著述業に転身
- 2009年 神戸国際大学教授に就任

風景としての日本語

毛丹青

日本語と中国語は、どちらも漢字を言語の骨組みとして成り立っている。漢字のなかには、一つの文字がいきいきとした画像として完成されているものもある。これは単なる意味を伝達する記号ではなく、われわれの視覚に直接訴えかけているものでもあるように思われる。中国語を母国語とする者にとって、日本語の仮名に引き付けられる時もあり、また漢字を「薄めた」後に残された線にしさかの違和感や困惑を覚えることもある。仮名の存在は既に文法的なレベルだけではなく、漢字を見る我々の視覚にとっては、そのイメージを緩和するような働きをも持っている。仮名は、漢字の偏旁だという定義がある。しかし、厚味のない仮名の筆画が、漢字の群の中を織り込むように遊泳するさまは、まるで沙漠のなかにあられてきたオアシスのようである。

ひとつの画像としての漢字の存在を考えると、その形の豊満さもさることながら、意味空間にまで溢れ出て奥深い潭のように水底はほとんど見えてこない。人間の想像力に与える漢字の影響は、実に大きなものであるが、そのすべてが、表形でないと言い表わせないような内なる企図で時には人に苦勞を重ねさせる結果にもなる。画像は空であり、また人間を束縛する籠でもある。二つの言葉で文筆活動を行っている私は、この年になって日本語に対するイメージがずいぶん変わった気がする。

言語は、一枚の風景画のようなものだ。美術館で作品を鑑賞することを連想される方もあるだろう。人間ははじめて絵に接した時に、距離感というものを忘れがちになるが、実際に視覚と作品の関係は、作品と自分との間に存在する距離によって決められることが多い。例えば、手元に持つ絵と、それを3メートル先に置きながら見る場合、さらに10メートルも離れてその絵がひとつの点景にしか見えない場合を考えると、我々の感じ方は果たして一緒だろうか。言い換えれば、距離というものは、一枚の絵に対するわれわれの凝視を和らげる効果があるに違いがない。そして絵を除いた周りの空間は絶えず視覚の領域にしばりこまれてきて、人間の感受性にますます大きくなっていく参照係数を提供してくれる。一枚の絵は、ただひとつの画像であるが、それは動き続ける現実の世界を切り取り紙面上に静止状態で凝固させたのであろう。人間は、生きている限り、思惟という活動を止めることが容易にできない。だから静止画像も一種の流動する感性に変わりながら、われわれの感覚を刺激することがあるように思われる。

日本語もひとつの画像であり、時には風景そのものである。とりわけ、仮名と漢字の共用は、あたかも水と油を混ぜたような状態に見える。水はかなで、透光に澄みきっている。ぎりぎりまで省略されたわずかな筆画は、まるで樹枝のように漢字の中をひっきりなしにかき回している。その一方、仮名によって壊された漢字は、妙にさっぱりしている。漢字は油で、仮名の中に滴らせるとすぐに凝固する。そしてその痕跡だけは、仮名と共に流れ漂いはじめる。漢字はひらかなと共に揺れ動きながら、かたかなによって浮かび上がることもある。漢字は動きまわるかなによって、その隠喩が解釈されるのであろう。

仮名を海とすると、漢字は島である。私は、一隻の船のように海と島の間を自由に往来する。出身地が漢字の島であることは、私の宿命かもしれないが、それは実に愉快的なことでもある。なぜなら私は更なる広大な空間を目の前にして、島を取り囲む大海原をも満喫することができるからである。二つの言葉で書き物をしているこの私に、神様が新しい生命を授けてくれた気がする。

(作家・神戸国際大学教授)